

# 《マティルデ・ディ・シャブラン》 作品解説 水谷 彰良

初出は筆者執筆のCD解説（2006年発売 UCCD-1171/3。詳細は本稿末尾参照）、本稿初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニー協会紀要）第31号（2010年発行）の拙稿『ロッシニー全作品事典（21）《マティルデ・（ディ・）シャブラン、または美貌と鉄の心》』。その増補改訂版を日本ロッシニー協会ホームページに掲載します。（2011年12月／2014年3月改訂。2016年1月増補）

## I-32 マティルデ・ディ・シャブラン、または美女と鉄の心

*Matilde di Shabran, o sia Bellezza, e cuor di ferro*

註：初演時のタイトルは《マティルデ・シャブラン、または美女と鉄の心（*Matilde Shabran o sia Bellezza, e cuor di ferro*）》。

**劇区分** 2幕のメロドラママ・ジョコーゾ（melodramma giocoso in due atti）

**台本** ヤーコポ・フェッレッティ（Jacopo Ferretti,1784-1852）

第1幕：全14景、第2幕：全11景、イタリア語

**原作** フランソワ＝ブノワ・オフマン（François-Benoît Hoffmann,1760-1828）がエティエンヌ・メユール（Étienne Méhul, 1763-1817）のために書いた《ウフロジース、または矯正された暴君（*Euphrosine, ou Le tyran corrigé*）》（1790年9月4日パリのコメディ・イタリエンヌ [サル・ファヴァール] 初演）の台本、及びモンヴェル（Monvel [本名ジャック＝マリ・ブテ Jacques-Marie Boutet],1745-1812）による5幕の散文劇《マティルド（*Mathilde*）》（1799年6月27日[革命暦第7年メシドール9日]パリのテアトル＝フランセ・ド・ラ・レピュブリク [Théâtre-Français de la République] 初演）。

**作曲年** 1820年12月～1821年2月（24日以前）

**初演** 1821年2月24日（土曜日）、ローマ、アポッロ劇場（Teatro Apollo [Teatro di Apollo]）

註：ナポリ再演で大幅に改訂（初演：1821年11月11日ナポリ、フォンド劇場 [Teatro del Fondo]）

**人物** ①コッラディーノ Corradino（テノール）……スペインの残酷な暴君。女嫌いで「鉄の心」の持ち主として恐れられている。 註：初版台本は「鉄の心のコッラディーノ Corradino Cuor di ferro」と記載。  
②マティルデ・ディ・シャブラン Matilde di Shabran（ソプラノ）……父親が死の床でコッラディーノに世話を任せた孤児  
③ライモンド・ロペス Raimondo Lopez（バス）……コッラディーノの宿敵。エドアルドの父  
④エドアルド Edoardo（コントラルト）……ライモンドの息子  
⑤アリブランド Aliprando（バリトン）……コッラディーノの侍医  
⑥イジドーロ Isidoro（バス [バス・ブッフォ]）……ナポリから来た放浪詩人  
⑦アルコの伯爵令嬢 Contessa d'Arco（メゾソプラノ）……コッラディーノの婚約者  
⑧ジナルド Ginardo（バス）……塔守  
⑨エゴルド Egoldo（テノール）……農民の長  
⑩ロドリゴ Rodrigo（テノール）……武装護衛兵の長  
⑪ウドルフォ Udolfo（黙役）……牢番

他に、村娘（黙役）、武装護衛兵と村人の合唱

**初演者** ①ジュゼッペ・フスコニ（Giuseppe Fusconi,?-?）

②カテリーナ・リップパリーニ（Caterina Lipparini,?-1855頃）

③カルロ・モンカーダ（Carlo Moncada,1780c-? [1840以降]）

④アンネッタ・パルラマーニ（Annetta Parlamagni,1795頃-? [1834以降]）

⑤ジュゼッペ・フィオラヴァンティ（Giuseppe Fioravanti,1790頃-1850頃）

⑥アントーニオ・パルラマーニ（Antonio Parlamagni,1759-1838）

⑦ルイージャ・クルチャーティ（Luigia Cruciani,?-?）

⑧アントーニオ・アンブロージ（Antonio Ambrosi,1786-?）

⑨⑩ガエターノ・ロンバルディ（Gaetano Rombardi,?-?）

①不詳

**管弦楽** (全集版が未成立で、初演版とナポリ改作版の編成も異なるため確定しないが、筆者の得た情報によるナポリ版の編成は、1 ピッコロ/2 フルート、2 オーボエ、2 クラリネット、2 ファゴット、4 ホルン、2 トランペット、3 トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、弦楽 5 部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器。なお、レシーニョ『ロッシーニ事典』[下記]の管弦楽編成は疑問の余地があるので採用せず、全集版の出版を待って修正したい)

**演奏時間** (ナポリ稿による) 序曲: 約 9 分 第 1 幕: 約 110 分 第 2 幕: 約 67 分

**自筆楽譜** ブリュッセル、王立音楽院ミショット文庫 (Conservatoire Royal de Musique, Fonds Michotte)

註: パチーニの作曲分とレチタティーヴォ・セッコを除く自筆楽譜。

**全曲初版** Artaria, Wien, 1822. (ピアノ伴奏譜。レチタティーヴォ・セッコを含まず)

Ratti & Cencetti, Roma, 1832. (総譜)

**全集版** I/32 (未出版。Jürgen Selk 校訂)

**構成** (全集版未成立のため 1996、2004、2012 年のロッシーニ・オペラ・フェスティバル [以下 ROF と略記] 上演プログラム及び Eduardo Rescigno, *Dizionario rossiniano*, Milano, RCS, 2002. のナポリ稿の構成を参照して作成し、初演稿との異同を別記する)

序曲 [Sinfonia]: ニ短調、2/4 拍子、モデラート〜ニ長調、4/4 拍子、アレグロ

註: 旧作《エドゥアルドとクリスティーナ》(1819 年 4 月 24 日ヴェネツィア、サン・ベネデット劇場初演)の序曲を若干改作して転用。

**【第 1 幕】**

N.1 導入曲 〈しっ、ここには誰もいない Zitti: Nessun qui v'è〉(合唱、ジナルド、エゴルド、アリブランド)

— 導入曲の後のレチタティーヴォ 〈風の如く立ち去る! Vanno via come il vento!〉(ジナルド)

N.2 イジドーロのカヴァティーナ 〈その間もアルメニア〜暗い木々の間で *Intanto Armenia – Nfra la famma*〉(イジドーロ)

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ 〈ああ、私のギター! Oh! Chitarella mia!〉(イジドーロ、ジナルド)

N.3 四重唱 〈邪な者よ! Alma rea!〉(コッラディーノ、イジドーロ、ジナルド、アリブランド)

— 四重唱の後のレチタティーヴォ 〈急いで牢獄に、さあ Presto in carcere, alò〉(ジナルド、イジドーロ、コッラディーノ、アリブランド)

N.4 レチタティーヴォ 〈私はここに Eccomi〉とエドアルドのカヴァティーナ 〈私の眼は涙する Piange il mio ciglio〉(エドアルド、コッラディーノ)

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ 〈父の腕に抱かれるなら Se fra i paterni amplessi〉(コッラディーノ、エドアルド、ジナルド)

N.5 マティルデとアリブランドの二重唱 〈気まぐれについて、愛想笑いについて Di capricci, di smorfiette〉(マティルデ、アリブランド)

— 二重唱の後のレチタティーヴォ 〈そうだ、愛らしいマティルデ Sì, vezzosa Matilde〉(アリブランド、マティルデ、ジナルド)

N.6 五重唱 〈これが女神ですって? Questa è la dea?〉(伯爵夫人、マティルデ、アリブランド、ジナルド、コッラディーノ)

— 五重唱の後のレチタティーヴォ 〈アルコの伯爵令嬢に Alla Contessa d'Arco〉(伯爵夫人、マティルデ、ジナルド、コッラディーノ、アリブランド、イジドーロ)

N.7 第 1 幕フィナーレ 〈ああ! 判ります。お話にならないで Ah! Capisco: non parlate〉(マティルデ、コッラディーノ、イジドーロ、ジナルド、アリブランド、エドアルド、ロドリゴ、伯爵夫人、合唱)

**【第 2 幕】**

— レチタティーヴォ 〈これで充分 Basta nfi a cà〉(イジドーロ)

N.8 第 2 幕の導入曲 〈コッラディーノの名前は Di Corradino il nome〉(合唱、イジドーロ)

— 第 2 幕導入曲の後のレチタティーヴォ 〈どこで、ああ哀れな父は Dove, o misero padre〉(ライモンド)

N.9 シェーナとエドアルドのカヴァティーナ 〈やっとなあなたが満足するなら Sazia tu fossi alfine〉(エドアルド、ライモンド)

— アリア [カヴァティーナ] [註] の後のレチタティーヴォ 〈ついにお前に会えたぞ…Pur ti raggiunsi alfin...〉(コッラディーノ、ライモンド、エドアルド、伯爵夫人、マティルデ、イジドーロ、ジナルド、アリブランド)

註：ROF 上演プログラムは、2012 年版も含めてカヴァティーナの次のレチタティーヴォを「アリアの後の」としている。どちらも校訂者が付したものであるため、一方に統一すべきであろう。

- N.10 六重唱〈裏切りは明らかです E' palese il tradimento〉(伯爵夫人、マティルデ、コッラディーノ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド)  
— 六重唱の後のレチタティーヴォ〈私に慈悲を話しても無駄だ Pietà mi parli invano〉(コッラディーノ)
- N.11 合唱〈死なせるのですか Mandare a morte〉(合唱)  
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈みな家に帰れ Andate a' vostri alberghi〉(コッラディーノ、伯爵夫人、イジドーロ、アリブランド、ジナルド、エドアルド)
- N.12 エドアルドとコッラディーノの二重唱〈何百もの苛立ちで Da cento smanie e cento〉(エドアルド、コッラディーノ)  
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈人生の半ばで Nel mezzo del cammin〉(イジドーロ、コッラディーノ、アリブランド、ライモンド、ジナルド、エドアルド、マティルデ)
- N.13 シェーナ、マティルデのロンドと第 2 幕フィナーレ〈マティルデ、それで? Matilde. Ebben?〉(コッラディーノ、マティルデ、エドアルド、アリブランド、ジナルド、ライモンド、イジドーロ、合唱)

#### 付記：初演稿の楽曲構成 (ナポリ稿との異同のみ記す)

註：初版台本と Rescigno 前掲書を参考にしたが、整合性を欠き一致しない。最終的には全集版の出版後に改訂したい。

##### 【第 1 幕】

- (N.2 イジドーロの) カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈お前は誰だ? なにが望みだ Chi siete? Che volete〉(イジドーロ、ジナルド)
- N.7 武装護衛兵 [Armigeri] の合唱〈どういふことだ? 夢みたいだ! Che ne dite? Pare un sogno!〉(合唱)  
— 合唱の後のレチタティーヴォ〈コッラディーノはどこだ? Corradino dov'è?〉(マティルデ、コッラディーノ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド)
- N.8 四重唱〈ああ! 判ります。お話にならないで Ah capisco: non parlate〉(マティルデ、コッラディーノ、イジドーロ、ジナルド)
- N.9 第 1 幕フィナーレ〈当惑し、迷い、戦いの音に Smarrito, dubbioso, al suono di guerra〉(マティルデ、伯爵夫人、エドアルド、コッラディーノ、ロドリゴ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド、合唱)

##### 【第 2 幕】

- N.10 導入曲〈78 万と Settecento ottanta mila〉(イジドーロ、合唱) [註：ジョヴァンニ・パチーニ作曲]  
— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈お聞きください Ascoltate.〉(ロドリゴ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド)
- N.11 シェーナ〈やっと満足するでしょう Sarai contenta alfine〉とライモンドのカヴァティーナ〈ああ! なぜ、なぜ死は Ah! perché, perché la morte〉(ライモンド、エドアルド)  
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ああ! これが美しい夢であるなら Ah! se questo è un bel sogno〉(エドアルド、コッラディーノ、ライモンド)
- N.12 シェーナ〈父よ…息子よ…貴様ら! Padre...Figlio...Voi!〉と三重唱〈ああ! 悲しげな眼が明るくなり Deh! Serena il mesto ciglio〉(エドアルド、コッラディーノ、ライモンド) [註：ジョヴァンニ・パチーニ作曲]  
— 三重唱の後のレチタティーヴォ〈エドアルド、逃げて Edoardo fuggì〉(マティルデ、伯爵夫人、コッラディーノ、ロドリゴ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド)
- [N.13 六重唱 (ナポリ稿では N.10) ]  
— 六重唱の後のレチタティーヴォ〈たぶん話すのは手遅れだ Forse tardi parlasti〉(マティルデ、エドアルド、イジドーロ)
- N.14 (レチタティーヴォの続き〈惨めだわ! どうすれば Misera! che farò〉と) マティルデとエドアルドの二重唱〈いいえ、マティルデ、死にはしません No, Matilde, non morrai〉(マティルデ、エドアルド) 註：後半部はジョヴァンニ・パチーニ作曲とされる。  
— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈私に慈悲を話しても無駄だ Pietà mi parli invano〉(伯爵夫人、エドアルド、コッラディーノ、アリブランド、イジドーロ、ジナルド)
- N.15 シェーナ〈彼女は無実です Ella è innocente〉とコッラディーノのアリア〈わが魂、マティルデよ Anima mia, Matilde〉(伯爵夫人、エドアルド、コッラディーノ、イジドーロ、アリブランド、ジナルド)  
— アリアの後のレチタティーヴォ〈人生の半ばで Nel mezzo del cammin〉(エドアルド、コッラディーノ、アリブ

ランド、イジドーロ、ライモンド、ジナルド) [註：マティルデを含まない]

N.16 シェーナ〈マティルデ、それで？Matilde. Ebben?〉とマティルデのロンド・フィナーレ〈ついに愛してくれますか？誰が愛さずにいられますか？Ami alfin? E chi non ama?〉(マティルデ、エドアルド、コッラディーノ、エゴルド、アリブランド、イジドーロ、ライモンド、ジナルド、合唱) [註：エゴルドの歌詞はない]

物語 (ナポリ稿に準拠) 時の指定なし。場所はスペインのコッラディーノの城とその周辺

### 【第1幕】

村人たちが野菜や果物の年貢を城へ届けに来る。迎えに出たのが塔守ジナルド一人なので村人が不審げにとどまると、コッラディーノの侍医アリブランドが来て、城の主人はひどく残忍な男であると説明し、城壁に掲げられた警告(「招かれずに城へ入る者は、その頭を砕かれるであろう」「平安を乱そうとする者は飢えと渇きにより、ここで死ぬであろう」)を示し、コッラディーノが大の女嫌いと教える。鐘が鳴り、村人は怖れをなして逃げ去る(N.1 導入曲)。ジナルドと牢番ウドルフォは、コッラディーノの囚人の見回りに行く。

城の背後の森から放浪詩人イジドーロがやって来る。空腹と渇きで疲れ果てた彼は、詩人は貧困が運命と嘆き、運勢の好転を期待してナポリから旅してきた、と歌う(N.2 イジドーロのカヴァティーナ)。彼もまた、城壁の警告を読んで逃げ出そうとするが、行く手を阻まれる。

コッラディーノが現れ、「お前は何者で、誰がお前に来るよう命じたのか」とイジドーロを詰問する。アリブランドはコッラディーノが彼を殺そうとするのを制止し、詩人は牢に入れられる(N.3 四重唱)。

アリブランドが主人にマティルデ・シャブラン——彼女の父親が死の床でコッラディーノに世話を任せた孤児——が面会を求めている旨を伝える。コッラディーノは入城を許すものの関心を示さず、すでに捕らえた宿敵ライモンドの息子エドアルドを見たいと望む。

コッラディーノの前に引き出されたエドアルドは父の苦悩を思い、嘆き悲しむ(N.4 レチタティーヴォとエドアルドのカヴァティーナ)。だが、彼はコッラディーノへの屈服を拒む。一方マティルデは、女の手管でコッラディーノの心を捉える計画をアリブランドに話す(N.5 マティルデとアリブランドの二重唱)。

アリブランドがマティルデに、「コッラディーノは愛を知らず、軍功にしか関心のないドン・キホーテのような男」と説明していると、マティルデを追い払いに伯爵令嬢が来たとジナルドが告げる。

伯爵令嬢とマティルデは喧嘩腰でにらみ合い、アリブランドとジナルドがとりなしていると、騒ぎを聞きつけたコッラディーノが現れる。マティルデが威嚇にひるまないので、コッラディーノは頭が混乱する(N.6 五重唱)。女たちが去ると、コッラディーノは自分の心の変化にとまどい、侍医アリブランドに相談する。アリブランドから「それが恋の病なのです」と言われたコッラディーノは魔法の仕業と考え、捕らえたイジドーロに疑いをかけて殺すよう命じるので、詩人は震え上がる。マティルデが戻り、目に涙を浮かべてコッラディーノに愛の告白をするので彼は全身の力が抜けてしまう。そして誘惑に興奮したコッラディーノは盾と兜を投げ捨てる。「ライモンドが兵を率いて息子を奪還しに来る」と報せにきたアリブランドは、胃を脱いだ主人を見て驚愕する。城の中庭ではエドアルドが軍隊行進曲を耳にして不安にかられる。そこへコッラディーノが部下を率いて現れ、イジドーロは宮廷詩人として戦いを記録すると宣言する。マティルデは、コッラディーノの勝利を祈りながらも涙ぐむエドアルドに同情し、彼の嫉妬をかきたてる。イジドーロに鼓舞され、出陣の歌が響き渡る(N.7 第1幕フィナーレ)。

### 【第2幕】

樹木の散在する平原。高い樹の上でイジドーロが戦場詩人を気取っている。コッラディーノの兵士と農夫たちが来ると、イジドーロは空想的武勇伝を読み上げて彼らを喜ばせる(N.8 第2幕の導入曲)。全員立ち去ると部下に置き去りにされたライモンドが現れ、絶望しながら息子を捜す。入れ替わりにエドアルドが現れ、父が死んだと思いき悲しむが、遠くに父の声を聞く(N.9 シェーナとエドアルドのカヴァティーナ)。

不意に出くわしたライモンドにコッラディーノが決闘を挑もうとすると、城に残したはずのエドアルドがいるので驚く。マティルデが彼を逃がしたと知ったコッラディーノは、怒りにかられて城を目指して走り出す。そのころ城では、エドアルドを逃がした罪をマティルデにきせようと企む伯爵令嬢がほくそえんでいた。なにも知らぬマティルデは、イジドーロから戦場の法螺話を聞かされる。そこへコッラディーノが帰城し、エドアルドを連れて来るよう命じてマティルデに釈明を求める。折悪しくエドアルドからマティルデに宛てた、逃亡の手助けに感謝する手紙が届けられる。

マティルデの裏切りを確信したコッラディーノは弁解に耳を貸さず、彼女を山腹から激流に投げ込んで殺すよう命じる。それを聞くと一同震え上がり、伯爵令嬢は策略の成功を喜ぶ(N.10 六重唱)。

一人になったコッラディーノは、「この世に女が存在するのは大いなる罪」と考える。マティルデに同情する農婦たちの歌が聞こえる(N.11 合唱)。コッラディーノが農婦たちを追い払うとイジドーロが来て、マティルデが激流で

死ぬ様子を詩的に脚色して語る。そこに現れたエドアルドがマティルデの無実を訴え、伯爵令嬢の差し金で逃亡してきたと告げる。コッラディーノは後悔の念にとらわれ、エドアルドは彼の野蛮さを責める（N.12 エドアルドとコッラディーノの二重唱）。

激流に臨む切り立った山の断崖。かたわらにライモンドの城が見える。夜。イジドーロとコッラディーノが現れる。鐘の音を聞いたコッラディーノは自責の念にかられ、マティルデの後を追って激流に身投げしようとする。そこにエドアルドが来てマティルデの生存を告げる。続いて姿を現したマティルデはコッラディーノを許し、ライモンドとの和解を促す。コッラディーノが永遠の平和を約束すると、マティルデも彼に永遠の愛を誓い、エドアルドに感謝するとイジドーロに結婚祝いのソネットを求め、そして「女は、勝利し、支配するために生まれた」と高らかに歌う（N.13 シェーナ、マティルデのロンドと第2幕フィナーレ）。

## 解説

### 【作品の成立】

1815年に本拠地をナポリに移したロッシーニは、《イングランド女王エリザベッタ》から《ゼルミーラ》に至る9作のオペラ・セーリアをサン・カルロ劇場のために作曲するかたわら、ローマ、ミラーノ、ヴェネツィア、リスボンからの委嘱に応じた。ローマ初演作は《トルヴァルドとドルリスカ》《セビーリャの理髪師》《ラ・チェネレントラ》など5作にのぼり、その最後を飾る《マティルデ・ディ・シャブラン》は通算32作目、まさに脂ののりきった時期の作品である。

1820年初夏、ロッシーニはナポリで《マオメット2世》の作曲に着手したが、7月に起きた炭焼き党の暴動が原因で9月に予定した初演がキャンセルされると<sup>1</sup>、ローマのアポッロ劇場（Teatro Apollo）の所有者ジョヴァンニ・トルローニア公爵（Giovanni Torlonia, 1755-1829）と同劇場の興行師ルイージ・ヴェストリ（Luigi Vestri, 1781-1841）の新作依頼に応じることにした。アポッロ劇場はその歴史がローマ初の商業オペラハウス、トルディノーナ劇場（Teatro Tordinona 1671年1月8日）に遡るが、最初の劇場は1697年に取り壊され、教皇クレメンス12世（在位1730～40）の命令で国費により再建された新劇場も1781年に消失、1795年に再建されてアポッロ劇場の名称を得た（開場作品はマルチェッロ・ダ・カプア [Marcello da Capua (マルチェッロ・ベルナルディーニ Marcello Bernardini, ?-?)の別名] 台本・作曲《ポーランド人の花嫁 (La sposa di polacca)》<sup>2</sup>）。

ロッシーニは母に宛てて9月19日に書いたと推測される手紙に、「ぼくはたぶん、今度の謝肉祭に作曲してローマに行き、たくさん支払われるでしょう」と記し<sup>3</sup>、同日、ローマのヴァッレ劇場の興行師ジョヴァンニ・パテルニ（Giovanni Paterni, 1779-1837）に宛てた書簡で「トルローニア氏と契約した今では、次の謝肉祭のためのあなたの親切な申し出を結果的にお受けすることが出来ないと申し上げます」と、新作の求めを丁重に断っている<sup>4</sup>。その前置きに当たる文章から、ロッシーニがトルローニア公爵との契約が完全に済むまでパテルニへの返事を意図的に遅らせたことが読み取れる。10月17日付の母宛の手紙では、「報酬は通常の1000 [註：貨幣単位未記載] です」と報告している<sup>5</sup>。同じ手紙でロッシーニは「ぼくのオペラ《マオメット2世》[の作曲]をすでに終えました」と記しているが、これは母を安心させるための嘘と思われる。この段階で《マオメット2世》の初演はカラブリア公爵夫人マリーア・イザベッラ（Maria Isabella di Borbone [La Duchessa di Calabria], 1789-1848）の聖名祝日に当たる11月19日に見送られていた。

ローマのための新作は同年12月26日（謝肉祭シーズン初日）に初演することが契約に盛り込まれたが、《マオメット2世》の筆は進まず、劇場委員会と興行師バルバーニアは11月6日の段階でロッシーニ作品の初演を危ぶみ、ルイージ・カルリーニ（Luigi Carlini, ?-?) 作曲《ソリマーノ [スレイマン] 2世、または3人のスルターンの後 (Solimano secondo ovvero le tre sultane)》の上演を検討し始めた<sup>6</sup>。ロッシーニは同月7日に母に送ったと推測される手紙に、「ぼくは6日後に上演されるオペラ《マオメット [2世]》[の作曲]を終えました。その後すぐにローマに向かって発ちます」<sup>7</sup>と書いたが、これが偽りであることは、まだ《マオメット2世》の作曲が終わらず、謝肉祭の1ヶ月前のローマ入りは不可能と予期したロッシーニが、自分が病気であると証明する診断書を劇場付きの医師フランコ・ナザリー（Franco Nasali, ?-?) に書かせたことでも判る（11月20日付。これはローマのトルローニア公爵と興行師ヴェストリに送られたと推測されるが<sup>8</sup>、本当に病気だったかどうかは不明で、作曲の遅れの言い訳の可能性もある）。

結局《マオメット2世》は予定から半月遅れて12月3日に初日の幕を開けるが、ローマのための新作が謝肉祭に間に合わないと見越したロッシーニは、あらかじめその台本をナポリ在住の作家（氏名不詳。ジョヴァンニ・シュミット Giovanni Schmidt, 1775頃-1840と推測）に依頼した。原作はモンヴェル（Monvel 本名ジャック＝マリ・ブテ Jacques-Marie Boutet, 1745-1812）による5幕の散文劇《マティルド (Mathilde)》（1799年6月27日パリのテアトル＝フランセ・ド・ラ・レピュブリク初演）であるが、これに基づくイタリア・オペラ《宿命的な仮定、または愛と義務 (Una fatale supposizione, ovvero Amore e dovere)》（ジュゼッペ・フォッパ台本、カルロ・コッチャ作曲、1811年1月19日ヴェネツィアのサン・

モイゼ劇場初演)が作られ、《マティルデ (Matilde)》の題名で再演を重ねたことから、ロッシーニに周知の題材であったと思われる<sup>9</sup>。

《マオメット2世》の初演を監督したロッシーニは《マティルデ》第1幕の台本を携えてナポリを立ち、12月9日にはローマに到着していた<sup>10</sup>。しかし、登場人物と歌手の顔ぶれが一致せず、検閲不可となる可能性もあってこれを断念し、《ラ・チェネレントラ》の台本作者ヤコポ・フェッレッティ (Jacopo Ferretti, 1784-1852) に新たな題材を求めた。けれども当時二つの台本を執筆中のフェッレッティは新作を書く余裕がなく、気晴らしに下書きしていた《コッラディーノ (Corradino)》を提案した。その原作はフランスの劇作家でケルビーニ《メデ》の台本作者フランソワ=ブノワ・オフマン (François-Benoît Hoffmann, 1760-1828) がエティエンヌ・メユール (Étienne Méhul, 1763-1817) のために書いた《ウフロジース、または矯正された暴君 (Euphrosine, ou Le tyran corrigé)》である (1790年9月4日パリ、コメディ・イタリエンヌ [サル・ファヴァール] 初演)。これを脚色したイタリア・オペラにアントーニオ・ソグラフィー台本/フランチェスコ・モルラッキ作曲《コッラディーノ (Corradino)》(1808年2月27日パルマ、インペリアレ劇場初演)と、ガエターノ・ロッシ台本/ステーファノ・パヴェージ作曲《美女たちの勝利、または鉄の心のコッラディーノ (Il trionfo della bella, ovvero Corradino Cuor di ferro)》(1809年2月3日ヴェネツィア、サン・モイゼ劇場初演)があり、フェッレッティはモンヴェル台本を下敷きにロッシーニ用の改作に着手した。そしてアポッロ劇場が題名を《マティルデ》で告知済みだったことから、ヒロインの名前を当初のイザベッラ・シャブランからマティルデ・シャブランに変更し、正式題名を《マティルデ・シャブラン、または美女と鉄の心 (Matilde Shabran, o sia bellezza, e cuor di ferro)》とした<sup>11</sup>。

ロッシーニは12月23日に母に宛てた手紙に「ぼくは新たなオペラを作曲中です。ぼくは楽しんでいて、大変健康です」と記したが<sup>12</sup>、ローマ入りの遅れと台本の変更により約束の期日に作曲を終えるのは不可能だった。アポッロ劇場はロッシーニの旧作《ラ・チェネレントラ》で謝肉祭シーズンの幕を開け、年明けの1821年1月25日には3作目に予定されたフィリッポ・グラツィオーリ (Filippo Grazioli, 1773-1840) 作曲《感謝の祭り、または白巡礼 (La festa della riconoscenza, o sia Il Pellegrino bianco)》を先行初演して時間稼ぎをしたが、その段階でもフェッレッティの台本は完成せず、ロッシーニは第2幕の幾つかの楽曲を4歳年下の作曲家ジョヴァンニ・パチーニ (Giovanni Pacini, 1796-1867) に委ねた。カターニア生まれのパチーニはテノール歌手の父をもち、17歳で最初の歌劇を作曲して早熟な才能を現し、《ドルシェイム男爵 (Il barone di Dolsheim)》(1818年)でスカラ座デビューを果たすと1820年12月26日にローマのヴァッレ劇場で初演した《エンリーコ5世の青春時代 (La gioventù di Enrico V)》で成功を収めていた。当時ローマにいたロッシーニがこのオペラを観劇した可能性があり、その才能を評価したものと思われる (後に両者は終生の友となる)。

パチーニが作曲したのは第2幕の導入曲 (N.10)、エドアルド、コッラディーノ、ライモンドの三重唱 (N.12)、マティルデとエドアルドの二重唱 (N.14) の後半部である<sup>13</sup>。ロッシーニ自身の旧作からの転用は、序曲 (原曲は《エドゥアルドとクリスティーナ》序曲。木管楽器パートの追加など若干変更して転用)、第1幕の武装護衛兵の合唱 (N.7 原曲は《リッチャルドとゾライデ》にあり)、コッラディーノのシェーナとアリア (N.15 原曲は《リッチャルドとゾライデ》にあり) である。レチタティーヴォ・セッコは、パチーニ以外の不詳の人物によって作曲されている。

かくして音楽がすべて揃い、稽古が開始されたが、2月24日の初演を前に新たな問題が持ち上がった。総稽古の日にコンサートマスター兼オーケストラ指揮者 (Primo violino, e direttore d'orchestra) ジョヴァンニ・ボッロ (Giovanni Bollo, ?-1821) が卒中で倒れ、第一ホルン奏者ジャコモ・カザッチャ (Giacomo Casaccia, ?-?) も病気のため演奏できなくなったのである。困り果てたロッシーニを救ったのが、コンサートのためローマに居合わせたヴァイオリンの鬼オニコニコ・パガニーニ (Niccolò Paganini, 1782-1840) だった。パガニーニは早くからロッシーニ作品を評価し、遅



初演稿 N.14 二重唱のピアノ伴奏譜(リコルディ社、1822年)とナポリ稿 N.3 四重唱の筆写総譜(共に筆者所蔵)

くとも 1819 年 3 月には両者の間に面識があったが<sup>14</sup>、翌 1820 年にはナポリで親しく交際し、ロッシーニが新作のためローマに行くことも知っていた（パガニーニのルイージャ・グリエルモ・ジェルミ宛の書簡。1820 年 10 月 27 日付）<sup>15</sup>。そして 1820 年 1 月に演奏会を予定したパガニーニは、ロッシーニに続いてローマ入りしていた。

ポッコに代わって初演の指揮を執ったパガニーニは、第 2 幕カヴァティーナのホルン独奏をみずからヴィオラで演奏して公演を成功に導いた<sup>16</sup>。新聞批評も著名なヴァイオリニストの関与を称賛しているが（『ノティーツィエ・デル・ジョルノ（Notizie del giorno）』1820 年 3 月 2 日付）<sup>17</sup>、舞台装置が未完成であるなどの準備不足を露呈したため観客の評価が真二つに割れたという。主な初演歌手は、ジュゼッペ・フスコーニ（コッラディーノ）、カテリーナ・リップアリーニ（マティルデ・シャブラン）、カルロ・モンカーダ（ライモンド）、アンネッタ・パルラマーニ（エドアルド）、ジュゼッペ・フィオラヴァンティ（アリブランド）、アントーニオ・パルラマーニ（イジドーロ）、ルイージャ・クルチャーティ（アルコの伯爵令嬢）であった。タイトルロールを歌ったカテリーナ・リップアリーニ（Caterina Lipparini,?-1855 頃）は 18 世紀末にボローニャに生まれ、パッツ・ブッフオの父を持ち、スタンダールは 1817 年 6 月にロヴィーゴでピエートロ・ジェネラーリ作曲《コッレ・エルボゾの伯爵夫人（La contessa di Colle Erbosio）》を観劇して彼女の容姿とブロンド髪の美しさを絶賛している（『1817 年のローマ、ナポリ、フィレンツェ（Rome, Naples et Florence en 1817）』1817 年 6 月 5 日）。キャリアは 1830 年代まで確認でき、1827 年にドニゼッティ《8 カ月を 2 時間で（Otto mesi in due ore）》初演でエリザベッタ役も創唱したが、その活動はイタリアに限定され<sup>18</sup>、コッラディーノ役のジュゼッペ・フスコーニも一流のテノールではなかった。

ロッシーニに監督義務のある最初の 3 回の上演が終わると、予期せぬ問題が持ち上がった。初演の遅れや他の作曲家に協力を仰いだことを理由に、トルローニアが作曲料の支払いを拒否したのである。怒ったロッシーニは総譜と管弦楽のパート譜を持ち去り、ローマ総督の枢機卿トマーズ・ベルネッティ（Tommaso Bernetti,1779-1852）に仲裁を求める手紙を送った（2 月 27 日付のロッシーニ書簡）<sup>19</sup>。その結果、トルローニアは約束の 500 スクーディを全額支払い、シーズン終了の 3 月 6 日まで上演が続けられた。

## 【特色】

このオペラはフェッレッチェの台本で「メロドラマ・ジョコーゾ」とされている。この用語はオペラ・ブッフアと同義であるが、シリアスな人物と悲劇的状况を含むことから事実上オペラ・セミセーリアと見なされ、登場人物も二つのタイプに分けられる。セーリアの人物はライモンドとエドアルドの二人で、囚われの身の息子とこれを救出しようとする父親の設定がドラマティックな状況を生み出す。エドアルドは男装したコントラルトのために書かれ、2 曲のソロをもつ。他の主要人物は基本的に喜劇的な役柄で、男性主役コッラディーノは極端な女嫌い、騎士道精神、残虐性を併せ持ちながらもマティルデに翻弄され、ドン・キホーテに等しい存在となる（声楽的には超絶技巧のアジリタと高音が求められ、ハイ C が頻出）。いたずら娘のようなマティルデは、女の手管を弄しながらもその可愛らしさでロッシーニのヒロインの中でも際立ち、《ドン・パスクワレ》ノリーナに似た新しいタイプの女性像を先取りする。彼女も敏捷で装飾的な歌唱に終始し、唯一のソロとして第 2 幕フィナーレに華麗なロンドを与えられている。

イジドーロは台本作者フェッレッチェのカリカチュアというべきユニークな存在で、詩人役は《試金石》や《イタリアのトルコ人》に前例があるものの、後述するナポリ稿ではテキストがナポリ方言に移され、存在感を高めている。詩人らしい言説と行動が面白さを際立たせる点で、彼は古典的な滑稽役とはタイプを異にする。重唱とアンサンブルを中心に構成され、男女の主役が登場のカヴァティーナやアリアを持たないのも本作の特色で、これはロッシーニの劇作上の変化を裏づけると共に、歌手への妥協なしに理想を追求した結果でもある（前記のように、初演歌手は一流とは言えないメンバーだった）。とりわけコッラディーノ役は密度の濃いアンサンブルに声楽的エネルギーを分散した感があり、アリアなしでも不足を感じさせない。台本作者が《コッラディーノ》として構想したことからも、真の主役が誰であるかは明白だろう。

後期のオペラとあって、個々の楽曲は充実している。ロッシーニは初演 9 ヶ月後のナポリ再演のために大幅な改訂を施したことから、ナポリ稿は序曲と全 13 のナンバーに集約され、初演稿のアリアの削除によりソロがイジドーロの 1 曲とエドアルドの 2 曲のみで、各 2 曲の導入曲、二重唱、フィナーレ、各 1 曲の四重唱、五重唱、六重唱、合唱と、アンサンブル中心の作劇となった。パセティックな序奏、二つの主題とクレシェンドからなる序曲（シンフォニー）は《エドアルドとクリスティーナ》（1819 年）の序曲の改作転用で、新たな第二主題を持つ。コッラディーノの力強い第一声が印象的な四重唱〈邪な者よ！（Alma rea!）（N.3）は、イジドーロ、



初期版のタイトル頁（パリ、シュレザンジェ社、1827 年頃。筆者所蔵）

ジナルド、アリブランドを伴うコッラディーノのアリアとも解釈でき、四つの部分からなる拡大アリア形式を適用している。マティルデが女の魅力でコッラディーノを籠絡する自信を歌う二重唱〈気まぐれについて、愛想笑いについて (*Di capricci, di smorfiette*) (N.5) も魅力的で、力強いカバレッタ主題は《セミラーミデ》(1823年) 第1幕アルサーチェとアッスールの二重唱の原型といえる。

滑稽味を帯びた女の対決で始まる大規模な五重唱〈これが女神ですって? (*Questa è la dea?*) (N.6) は、マティルデの魅力に戸惑うコッラディーノの中間部を経て、アジリタを駆使する旋律、早口言葉、クレシェンドによる爽快なアンサンブルで締め括られる。20分を超える長大な第1幕フィナーレ〈ああ! 判ります。お話にならないで (*Ah! Capisco: non parlate*) (ナポリ稿 N.7) にも魅力的な楽想があり、中間部 (この同じ喜びは (*Piacere ugual*)) の旋律は序曲の第二主題としても使われる。続く行進曲の音楽は《湖の女》(1819年) 第1幕フィナーレのそれをコミカルに改作したもので、無伴奏の七重唱を挟んで合唱を伴うアンサンブルに拡大され、見事なクライマックスを形成する (詩人の繰り返す擬音「パタティン、パタタン、パタトゥン! (*Patatim patatam patatum!*)」も愉快)。華麗な歌唱技巧は随所に散りばめられているが、とりわけ第2幕エンドアルドとコッラディーノの二重唱〈何百もの苛立ちで (*Da cento smanie e cento*) (ナポリ稿 N.12) における二つのアレグロ部 (この二重唱は、急〜緩〜急の三部形式をとる)、第2幕フィナーレ (ナポリ稿 N.13) マティルデのロンド〈尊大なトランペットは黙り (*Tace la tromba altera*) が秀逸である。

### 【上演史】

初演からほどなくナポリのフォンド劇場 (Teatro del Fondo) での再演が決まると、ロッシーニはパチーニの楽曲を自分の新曲と差し替える改作を行った。それが前記したナポリ稿で、題名を《美女と鉄の心 (*Bellezza e cuor di ferro*)》に変更し、初演は1821年11月11日<sup>20</sup>に行われた。これはコッラディーノをジョヴァンニ・ダヴィド [ダヴィデ] (Giovanni David, 1790-1864)、マティルデをアデライデ・コメリーニ (Adelaide Comelli-Rubini, 1794-1874)、イジドーロ役を著名なブッフオ歌手でカザッチェロ (Casacciello) と呼ばれたカルロ・カザッチャ (Carlo Casaccia, 1768-?) が務めるなど、ローマ初演よりも格上メンバーによる上演だった。

初演稿とナポリ稿の間には多くの異同があり、同一楽曲にも改訂が施され、イジドーロの登場シーンが増え、そのテキストはナポリ方言に書き直されている。第1幕の顕著な違いは《リッチャルドとゾライデ》から転用した合唱の有無であるが、第2幕に関してはパチーニの楽曲をすべて新曲と差し替え、《リッチャルドとゾライデ》から転用したコッラディーノのシェーナとアリアを除去して新たな二重唱を加えるなど完全に別バージョンとなっている。ナポリ稿の自筆楽譜にレチタティーヴォ・セッコを欠くことから、ROF では上演の際にパルマの図書館所蔵の筆写譜のそれを採用しているが、ナポリの上演ではレチタティーヴォ・セッコではなく台詞と対話を用いた可能性がある。

ナポリ稿が本作の決定版に位置するとはいえ、ナポリ方言の特殊性もあり、流布したのは初演稿の方であった。題名は次の再演で《マティルデ・ディ・シャブラン、または美女と鉄の心 (*Matilde di Shabran, ossia Bellezza, e cuor di ferro*)》となり、その後は《マティルデ・シャブラン》と《マティルデ・ディ・シャブラン》の双方が題名に使われている。作品の人気は高く、初演翌年 (1822年) にはヴェネツィア (サン・ベネデット劇場)、ベッルーノ (デッラ・チッタ劇場)、パルマ (ドゥッカーレ劇場)、フィレンツェ (ペルゴラ劇場。題名は《イル・コッラディーノ》)、ミラーノ (スカラ座)、シエナ (デッリ・アッカデーミチ・ロッシ劇場) その他の諸劇場で再演され、国外でも1822年のマルタとヴィーン (5月7日ケルントナートア劇場。ロッシーニは楽曲の差し替えなどヴィーン上演用の改訂を施す<sup>21</sup>) を皮切りに、1823年ロンドン (キングズ劇場)、1825年リスボン、1826年バルセロナとマドリッド、1827年ドレスデン、1829年サント・ペテルブルク、リオデジャネイロ、パリ、1834年ニューヨークとフィラデルフィア……と世界各地で上演をみた。19世紀最後の上演は1892年フィレンツェ、20世紀の復活上演は1974年3月27日にジェノヴァのマルゲリータ劇場で行われた。

批判校訂版によるナポリ稿の復活上演は1996年8月13日ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われ (パラフェスティヴァル。演出: ピエラッリ、指揮: イヴ・アベル)、主演コッラディーノに予定されたブルース・フォードが降板し、他のオペラの控え歌手だった23歳のファン・ディエゴ・フローレスがこれを歌って脚光を浴びた。ほどなくベルカント・テノールの頂点に立ったフローレスは、2004年、2012年と8年おきにペーザロ再演で主演し、本作の再評価



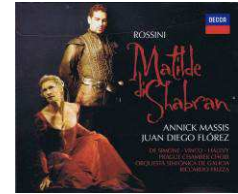
1996年、2004年、2012年 ROF プログラム (筆者所蔵)



に多大な貢献をしている（共にマリーオ・マルトーネ演出。2004年は指揮：リッカルド・フリッツァ、マティルデ：アニク・マシス。2012年は指揮：ミケーレ・マリオッティ、マティルデ：オルガ・ペレチャツコ）。

### 推薦ディスク

- ・2004年ペーザロ、ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァル上演のライブ録音 (Decca CD3 枚組、国内盤)  
リッカルド・フリッツァ指揮ガリシア交響楽団、ブラハ室内合唱団 マティルデ：アニク・マシス、  
コッラディーノ：ファン・ディエゴ・フローレス、エドアルド：ハダル・ハレヴィ、アリブランド：  
マルコ・ヴィンコ、イジドーロ：ブルーノ・デ・シモーネほか
- ・2012年8月ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァル上演映像 Decca 0743813 (DVD 2 枚組)、0743816 (BD)  
海外盤  
マリーオ・マルトーネ演出、ミケーレ・マリオッティ指揮ボローニャ市立劇場管弦楽団&合唱団 マ  
ティルデ：オルガ・ペレチャツコ、コッラディーノ：ファン・ディエゴ・フローレス、エドアルド：  
アンナ・ゴルヤコヴァ、アリブランド：ニコラ・アライモ、イジドーロ：パオロ・ボルドーニャほか



- <sup>1</sup> 《マオメット 2 世》の成立過程と 1820 年 7 月に起きた炭焼き党の暴動については、筆者によるロッシェニ全作品事典《マオメット 2 世》の作品解説で明らかにする。
- <sup>2</sup> アポッロ劇場に関する基本情報は Alessandro Ademollo, *I teatri di Roma nel secolo decimosettimo*, Roma, L. Pasqualucci, 1888. 及び Stefania Severi, *I teatri di Roma*, Roma, Newton & Compton, 1989. に基づく。但し、開場を 1795 年 3 月とするのは疑問で、現在の多くの文献は 1796 年謝肉祭とする。この劇場はテヴェレ川の氾濫を抑える護岸拡張工事により、1888 年に取り壊された。
- <sup>3</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, IIIa: Lettere ai genitori. 18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 2004., p.270. [書簡 IIIa.149]
- <sup>4</sup> Gioachino Rossini, *Lettere e documenti., vol. I., 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822.*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, Fondazione Rossini, 1992., p.433. [書簡 214]
- <sup>5</sup> Rossini, *Lettere e documenti, IIIa.*, p.271. [書簡 IIIa.150]
- <sup>6</sup> これに関するドキュメントは、Rossini, *Lettere e documenti., vol. I.*, pp.439-444. [書簡 218-222] を参照されたい。
- <sup>7</sup> Rossini, *Lettere e documenti, IIIa.*, p.273. [書簡 IIIa.151]
- <sup>8</sup> *Ibid.*, p.446. [書簡 224] 及び p.447. n.2.
- <sup>9</sup> 以下、原作などに関する基本情報の多くは、2004 年と 2012 年 ROF (ロッシェニ・オペラ・フェスティヴァル) 《マティルデ・ディ・シャブラン》プログラム掲載の論考 Bruno Cagli, *Virtuose fanciulle e accorte bugie* [pp.13-39. 1996 年 ROF プログラム論考の増補版]における記述 (1830 年の『劇場新聞 (Gazzetta teatrale)』に掲載されたフェレッティ書簡の引用を含む) 及び Selk, Jürgen, *Matilde di Shabran: l'ultima opera semiseria di Rossini.* [pp.69-79.] に基づく。
- <sup>10</sup> 12 月 9 日付の母宛の手紙に「ぼくは完璧な健康状態でローマにいます」と書かれている (*Lettere e documenti, IIIa.*, p.274. [書簡 IIIa.152])
- <sup>11</sup> 作品の成立に関する基本情報は、前記 Cagli と Selk の論文に基づく。
- <sup>12</sup> Rossini, *Lettere e documenti, IIIa.*, p.276. [書簡 IIIa.154]
- <sup>13</sup> Philip Gossett, *Le fonti autografe delle opere teatrali di Rossini.*, in Nuova Rivista musicale italiana Anno II - n.5, settembre / ottobre 1968., Roma, ERI, 1968., p.956.
- <sup>14</sup> バガニーニは 1819 年 3 月末にナポリのサン・カルロ劇場でバルバーイアのマネージメントによる演奏会を数回予定したが、《エルミオーネ》の初演と重なったため 3 月 31 日にフォンド劇場で演奏した。
- <sup>15</sup> (a cura di Roberto Grisley) Niccolò Paganini, *Epistolario., vol. I 1810-1831.*, Milano, Skira, 2006., pp.192-193.
- <sup>16</sup> バガニーニは最初の 3 回の上演を指揮した。
- <sup>17</sup> Paganini, *Epistolario., vol. I.*, pp.192-193., n.3
- <sup>18</sup> 経歴は Rossini, *Lettere e documenti., vol. I.*, pp.330-331., n.2. を参照されたい。
- <sup>19</sup> Rossini, *Lettere e documenti., vol. I.*, pp.474-475. [書簡 242]
- <sup>20</sup> Eduardo Rescigno, *Dizionario rossiniano*, Milano, RCS, 2002., p.730. は 12 月 11 日フォンド劇場、全集版《ゼルミエラ》序文 p. XXIV. は 12 月 11 日フィオレンティーニ劇場とするが、ROF プログラムと Cagli 論文は一貫して 11 月 11 日フォンド劇場を採用。
- <sup>21</sup> ヴィーン・ヴァージョンの概要は CD: *Matilde di Shabran* (Bongiovanni GB2242/44-2) ブックレット所収 Reto Müller, *Matilde di Shabran zum dritten.* を参照されたい。